

共通論題「ソブリン債を取り巻く諸問題」

アジア諸国のソブリン債市場の現状と課題

奥田 英信（一橋大学）

1997年のアジア通貨金融危機を契機として、アジア各国では従来の銀行に依存しすぎた金融構造を転換し、銀行以外のチャンネルを通じた長期資金の調達手段を強化するため、市場の育成が積極的に進められて来た。この結果、発達の遅れていた債券市場でも着実な成長が見られ、特に国公債市場は各国で急成長を遂げた。アジア諸国は堅調な経済成長を続けており、概ね財政規律も健全に維持されているところから、現在のところ国公債市場に深刻な問題は顕在化していない。しかし、一部の国々では政府債務の持続可能性に懸念が存在しており、他方では金融機関による大量の国公債保有が民間資金のディスインターメディアエーションを引き起こしていると指摘される国々もある。また金融グローバル化の下で、アジア諸国でも国公債市場への海外資金流入が拡大しており、マクロ金融を不安定化させる危険性も常に指摘されている。各国政府は、これらの問題を制御しながら今後の債券市場の発展をどう進めるか、微妙な舵取りが求められている。

【略歴】

1956年生。一橋大学経済学部卒業，ミネソタ大学大学院博士課程修了（P h . D . in Economics）。日本輸出入銀行，一橋大学経済学部専任講師，助教授を経て，2000年4月から現職。国際協力銀行開発金融研究所客員研究（2000-2009年），財務省外国為替等分科会委員・外資特別部会委員。著書・編著に『ASEANの金融システム』，『アジアの経済発展と金融システム』，『新版開発金融論』。